

ポジティブリスト対象病害虫の解説

ニセアメリカタバコガ

学名：*Heliothis virescens* (Fabricius)

英名：Tabacco budworm

本種は、本邦既発生のツメクサガ*H. maritime*と同じ*Heliothis*属の一種で広範な植物を加害する害虫である。特にタバコやワタなどでつぼみ、花並びに若芽を好んで食害し、結果として植物体に穴を開けるほか、食害部に2次的に病菌の感染を引き起こすとされている。

輸入植物検疫ではペルー産アスパラガスからの発見事例が大半を占め、通常卵態で発見される。その他にアメリカ合衆国産トマトやメキシコ産ブルーベリーからも発見されている。

分布地域：北・中央・南アメリカ諸国。

寄主植物：タバコ、ダイズ、ワタ、アスパラガス、トマト、カーネーションなどの各種野菜や切り花類

形態：成虫の前翅長は11～15mm程度。雄は前翅が緑色～緑褐色、後翅は純白色で外縁部のみわずかに暗褐色を帯びる。雌は前翅が褐色、後翅は基部のみが純白色で外縁部は明瞭に暗色化する。雌雄とも前翅に3本の斜線紋を有し、最も外側のものは翅頂よりはるか基部寄りの前縁で終わる。近似種の*H. subflexa*では最も外側の斜線紋が翅頂付近に達することで本種と識別することができる。

幼虫は終齢で体長36mm程度。体色は黒褐色、緑黄色、ピンク色など変異に富み、体表に細かいトゲを持つ。輸入植物検疫でペルー産アスパラガスから本種と同様に卵態で発見される*Copitarsia turbata*は幼虫の体表が平滑であることから本種と識別することができる。



図 ニセアメリカタバコガ成虫（上：雄、下：雌）

ヤガ科の一種

学名：*Helicoverpa punctigera* (Wallengren)

英名：Native budworm

本種は、オオタバコガ(*H. armigera*)やタバコガ(*H. assulta*)と同じヤガ科*Helicoverpa*属に属し、幼虫は多種類の農作物、観賞用植物などのつぼみや果実を食害する。

原産地のオーストラリアでは混生するオオタバコガとともに同国の農業に最も強く影響する害虫とされる。我が国の輸入植物検疫では、主に同国産のアスパラガスから付着した卵態がよく発見されている。

分布地域：オーストラリア及びその周辺の島々。熱帯から温帯まで広範囲に分布する。

寄主植物：広食性で様々な植物を加害する。特に、アスパラガス、アマ、インゲン、エンドウ、ダイズ、タバコ、トマト、ヒマワリ、ワタなどを好む。

形態：成虫は開張30～38mm程度で、色彩は雄と雌で大差ない。卵、幼虫、蛹及び成虫の外観は、いずれもオオタバコガとよく似ており（図1）、本種とオオタバコガを確実に識別するためには交尾器を観察することが望ましい。

交尾器の主な観察ポイントは、雄の把握器の形状（図2）で、本種では全体の幅が狭く先端部近くでくびれる点でオオタバコガと識別可能である（同図B: 矢印）。



図1 *H. punctigera* 雌成虫

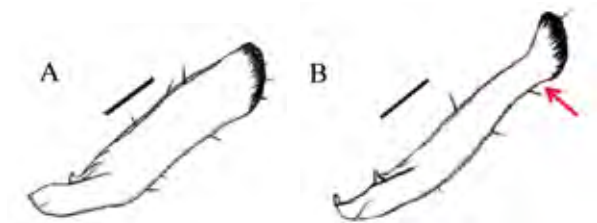


図2 把握器 A: オオタバコガ B: *H. punctigera*（後面から見た右片の内面図。実線は長さ1mm。）

アザミウマ科の一種

学名：*Dichromothrips corbetti* Priesner

英名：Orchid thrips, Vanda thrips

本種は、本邦既発生のランノハナアザミウマ（*D. smithi*）と同じ*Dichromothrips*属の一種で、ラン科の花に寄生し吸汁することにより、加害部位を変色させ品質を低下させる害虫である。発生地ではラン栽培の重要な害虫のひとつとされている。輸入植物検疫ではシンガポール産アランダ、アランテラ、モカラ属のラン切り花からよく発見されている。

分布地域：台湾、マレーシア、シンガポール、タイ、インド、インドネシア、フィリピン、アメリカ合衆国、ハワイ、オーストラリアなど。

寄主植物：バンダ、デンドロビウム、アランダ、アランテラ、モカラ属等ラン科の花、葉。

形態：雌成虫は長翅型で、体長は1.4～1.6mm。体色は暗褐色だが、脛節先端及びふ節は黄色、前翅の基部は淡色。雄成虫は短翅型で体長約1.1mm。体色は腹部第3～6節が灰褐色で、脛節及びふ節は黄色、他は暗褐色（図1）。

本属に含まれる種はいずれも、触角が8節、単眼前方刺毛が1対、腹部背板に微櫛歯を持たない等の共通の特徴をもっている。同属他種とは前胸背板後縁角に長刺毛を欠くこと（図2）、後胸叉状器の小棘が弱く痕跡的なこと（図3）で区別することができる。

図1
D. corbetti 成虫
（左：雌、右：雄）



図2 *D. corbetti*
前胸背板後縁角刺毛



図3 *D. corbetti*
後胸叉状器の小棘

クダアザミウマ科の一種

学名：*Haplothrips robustus* Bagnall

英名：なし

本種はクダアザミウマ科に属し、イネの害虫であるイネクダアザミウマ（*H. aculeatus*）と同じ*Haplothrips*属に含まれる。

我が国の輸入植物検疫では、オーストラリア産アスパラガスからよく発見され、その他には、フトモモ科カメラウシウムやミカン科ボロニアなどの切り花から発見されている。

分布地域：主にオーストラリアに分布し、その他アメリカ合衆国（カリフォルニア州、ニューメキシコ州）、メキシコ、ハワイ。

寄主植物：成虫はイネ科、キク科及びタデ科などの花から発見される。また、ニューメキシコ州ではレタスを害するとの記録がある。

形態：雄は未知。雌は体長2.3mm前後。体色は全体的に暗褐色（図1）。複眼後方刺毛は複眼後縁を超え先端は開裂する。触角は8節で、第3節に2本、第4節に4本の感覚錐を持つ。前胸背板の前縁、前縁角、後縁角及び後側板に各1対の先端が開裂した長刺毛を持つが、前胸背板の側縁中央部には長刺毛を欠く。前翅は幅広く中央部でくびれ、重複縁毛を欠く（図2）。

イネクダアザミウマは、触角第3節の感覚錐が1本であること、頭部及び前胸背板の長刺毛先端は尖ること、前胸背板前縁に長刺毛を欠くこと及び前翅は重複縁毛を持つ（図3）ことにより本種と識別できる。



図1 *H. robustus*雌成虫



図2 *H. robustus*前翅先端



図3 イネクダアザミウマ前翅先端

ビーズレイコナカイガラムシ

学名：*Pseudococcus jackbeardsleyi* Gimpel & Miller
英名：Jack Beardsley mealybug

本種は、本邦既発生のクワコナカイガラムシ（*P. comstocki*）と同じ*Pseudococcus*属の一種で、寄主範囲が広く、植物の幹、枝、葉及び果実を加害吸汁する害虫である。本種は、旺盛な繁殖力によって一度侵入すると防除が困難な害虫で、現在、東南アジア地域で分布が拡大している。

輸入植物検疫では、タイ産野菜、アメリカ合衆国産グレープフルーツなどから発見されている。

分布地域：北米・中南米諸国、東南アジア諸国、セيشェル、ハワイなど。

寄主植物：バナナ、トマト、ジャガイモ、コショウ、ハイビスカスなど非常に広範囲である。

形態：雌成虫は体周囲に17対の細長いひも状の口ウ突起がある。生育条件が良いと尾端の口ウ突起は特に長くなり、外観では近似種との識別が困難なため、同定はプレパラート標本で行う。本種は口わく型分泌管を持ち（図2）、体周囲の口ウ座は17対で、眼の周囲に硬化した縁があり、その縁の中に微小円板孔と呼ばれる小さな孔が4～9個存在する（図3）。*P. elisae*などの近似種とは、本種の口わく型分泌管が、頭部背面に1対あり、腹部背面には14～27個と多く、第7腹節背面亜縁部にも存在することで識別可能である。



図1 *P. jackbeardsleyi* 雌成虫 図3 眼の縁と微小円板孔(→)

カスミカメムシ科の一種

学名：*Lygus hesperus* Knight
英名：Western tarnished plant bug

本種は、本邦既発生のマキバカスミカメと同じカスミカメムシ科マキバカスミカメ属の一種で、様々な植物を加害する重要害虫として知られている。輸入植物検疫では、アメリカ合衆国産ブロッコリー、イチゴなどの野菜類、クリスマスツリー用のモミの木の枝（寄主植物かは不明）などからよく発見されている。

本種には、特に侵入を警戒する*L. lineolaris*をはじめ、分布地域及び寄主植物を同じくする近縁種が多く存在するが、輸入植物検疫における発見頻度は本種が格段に高い。

分布地域：カナダ、アメリカ合衆国、メキシコの主に西部地域。

寄主植物：アブラナ科、キク科、マメ科、バラ科などの野菜類、果実類、牧草など様々な植物。

被害：茎葉の生長点付近や幼果を吸汁するため縮葉や落果・奇形果を引き起こし、採種ほでは不稔種子の原因となり甚大な被害をもたらす。

形態：体長約6mm。外観は厚みのある卵型で、体色は緑～淡黄色～明るい茶色と色彩変異が著しいが、一般的には黄色味を帯びた緑色。額前頭部に帯状の条紋を欠く（図2）。胸部には粗い点刻を持ち、小楯板には中央が深く切れ込んだ黄色いハート型の模様を持つ。

近縁種の*L. lineolaris* も体色や斑紋などの変異が著しいが、額前頭部に帯状の条紋を有する（図3）ことで識別可能である。

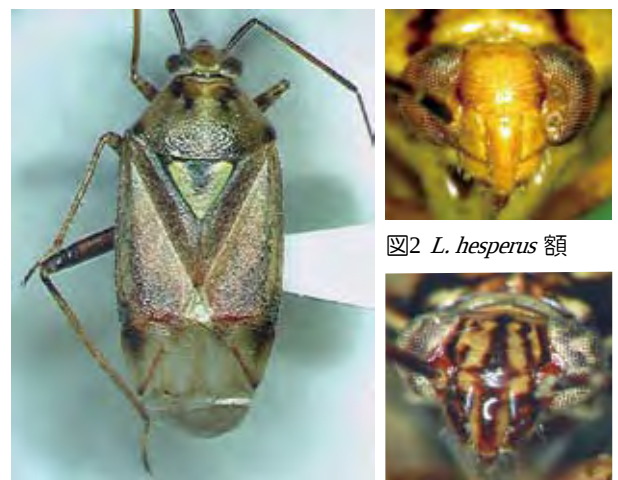


図1 *L. hesperus* 雄成虫

図2 *L. hesperus* 額

図3 *L. lineolaris* 額

ハモグリバエ科の一種

学名：*Liriomyza langei* Frick

英名：Serpentine leafminer, Pea leafminer

本種は、トマトハモグリバエ (*L. sativae*) やマメハモグリバエ (*L. trifolii*) と同じ *Liriomyza* 属のハモグリバエで、多くの植物を加害する重要害虫である。輸入植物検疫ではアメリカ合衆国産のレタスやセロリから度々発見されている。本種は幼虫が植物の葉に潜り組織を食害し、絵かき状の潜孔を示すことで、発育不良や立ち枯れ等の深刻な被害をもたらす。

分布地域：アメリカ合衆国、ハワイ、メキシコ

寄主植物：キク科、ナス科、マメ科、アカザ科、セリ科、ウリ科、ユリ科、アブラナ科など多種の植物

形態：成虫の体長は1.7 ～ 2.25mm。体色は光沢のある黒色で、部分的に黄色。翅は透明で脚は黒褐色である。頭部の外頭頂剛毛は黒色部から、内頭頂剛毛は黒色と黄色の境界付近から生じる。小楯板は中央が黄色で両端は黒色。近縁種のトマトハモグリバエ、マメハモグリバエやナスハモグリバエは、脚が黄色であることから本種と識別可能である。また本種は、日本、東南アジア、カナダ、中南米、ヨーロッパなどに分布するアシグロハモグリバエ (*L. huidobrensis*) と形態的に極めて酷似しており、過去にはそのカリフォルニア系統とされていた時期もあるが、近年は遺伝的な相違により別種として取り扱われている。



図 *L. langei* 成虫

キイチゴ類さび病

病原学名：*Pucciniastrum americanum* (Farlow) Arthur

英名：Late leaf rust

本病原菌は、異種寄生菌で、トウヒを中間宿主とするキイチゴ類のさび病菌である。

分布地域：カナダ、アメリカ合衆国、ハワイ、メキシコ、アルゼンチン、チリ、ブラジル

宿主植物：夏・冬孢子世代宿主はバラ科キイチゴ属、さび孢子世代宿主はマツ科シロトウヒ、アリゾナトウヒである。なお、イチゴ属への寄生は知られていない。

病徴：キイチゴ類での病徴は夏期に葉の裏に鮮やかな淡黄色の小さな斑点がみられる。これは夏孢子堆で、やがて葉は黄化、褐変し枯死する。果実では個々の小核果上に夏孢子堆を形成して商品価値を損なう(図1)。また、葉柄、枝、がくにも夏孢子堆を形成する。

病原菌の形態：夏孢子堆は淡黄～橙黄色。その外側を囲むように、幅、高さともに70～110μm、円錐形あるいは円筒形の護膜を形成する。護膜の先端に4～6個の口縁細胞を形成し、口縁細胞は22～31×13～15μmの大きさで、中央部はくびれ、基部は平滑、先端部に高さ3～4μmの刺を有する。夏孢子(図2)は倒卵形～楕円形、鮮黄色で、大きさは18～27×11～17μm、表面に2.5～3μm間隔で0.75×1～1.5μmの刺をもつ。冬孢子堆は葉裏の表皮に散生し、器官としては目立たない。冬孢子は表皮下で相互に着生して生じ、球形～楕円形。大きさは15～22×15～30μm。表面は平滑で褐色。隔壁を有し、2室以上の細胞を有する。

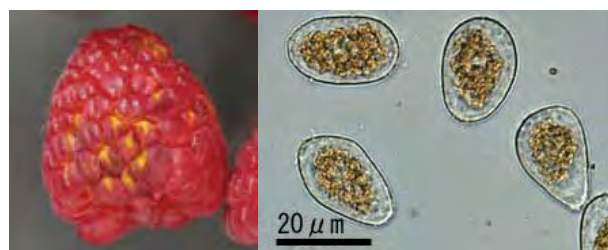


図1 果実上の夏孢子堆

図2 夏孢子